生徒会長とバカたちの戦争記

アキト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生徒会長とバカたちの戦争記

【Nコード】

N0526V

【作者名】

アキト

【あらすじ】

去年まで女子高だった高校に入学した星宮一人は中学校時代の心の傷を引きずりながら入学した。その入学した高校には校内で平気で銃をぶっ放す軍隊を引き連れた生徒会長がいて、その生徒会長のせいでこの学校では恋愛が全面禁止だという。その生徒会長と戦うという軍団に星宮は半ば強引に入れられて……。バカだけど、やるときはやる仲間達と生徒会長の座をのつとる為に戦うバカどもの戦い。

第一話

桜が舞う4月、それはどこの学校でも入学式があるシーズンです。僕が入学する高校もそうです。

僕が入学する、東葉学園とうようは去年まで女子高で今年から共学になった学校だ。そのせいで、女子の比率が圧倒的に多い。その女子目当てで受験した者が大勢いたそうだ。

しかし、この学校に入る為の条件は極めて厳しかったせいもあり、大半の不順な理由で受けた者は落ちたと聞いた。

僕こと星宮一人が、わざわざその難関を突破してここに入りたかった理由は、中学校ではあまり人付き合いが得意ではなかったせいで、友達も出来ずに常に一人でいたせいでイジメまがいのことをされたりしたのでたくさんの方が受ける近くの高校に行きたくないと思ったからだ。幸い僕は勉強は出来たので難関校でも余裕で受かるぐらいの実力があつた。その力を使ってこの学校に入学することが出来た。

そして、今僕は入学式に出る為に校門をくぐるうとしたところで自分のした失敗に気づいた、

『女子が多すぎるわーーーーー!!!!!!』

そう、僕は人付き合いが苦手なせいで女子とまともに会話すら出来ないのだ。しかしこの学校では、5つあるクラスの1クラスの総人数の40人中10人しか男子がいないという壮絶な環境なのであつた。

『やばい、やばい完全に失敗したよこれ!』

と、今更な感じの自分の失敗を悟つた僕であつた、そこに

「おい、お前」

ちよつと不良っぽい声が聞こえてきた。僕は中学校の時の体験のせいで不良というものに恐怖していたのでビクビクしながら振り返つた、そこには少し着崩した制服を着た男子生徒が立っていた。こ

の時間に来るということは多分僕と同じ入学者であろう。

「あ、すいません。邪魔でしたね。今退けますんで」

僕はあまり近づきたくなかったので素直に道を開けようとした。しかしその男子生徒は、

「ああ、違う違う。お前に用があるんだよ」

僕はその言葉を聴いて気絶しそうになった。何しろこういう呼ばれ方は絶対にカツアゲなどの暴力的なことの前兆だと知っていたからだ。

『うわー。初日から不良に絡まれた挙句、カツアゲされそうになってるよ。てゆーかこの人誰だよ!？』 などと心の中で叫びつつ、僕は動揺が顔に出ないように神経を集中しながら聞き返した。

「あ、あのー、何でしょうか?」

「今日、終業式が終わったら呼びに行くから組を教えろ」

その男子生徒はもう完全にカツアゲルート確定の一言を言ってきた。僕は必死で気絶しないように気をつけつつ、事前に発表されてあった組を素直に告げた。こういふときは従うのが一番だと経験が言っていた。(ちなみに僕は2組である)

「2組だな、分かった。それまでに準備を済ましておけよ」

そういいながら、その男子生徒は体育館のほうに行ってしまった。僕はもしかしたら今日が最後の1日になるのではないかと恐怖しながら、体育館に歩いていった。

あんなことを言われた後だったので僕は入学式の最初の方はほとんど聞いていなかった。ふっ、と我に返ったときはもう入学式は在校生代表と入学者代表のあいさつだけになっていた。

そして、在校生代表の挨拶が始まるうとしていた。代表といっても生徒会長がやることなのでまあ型どりの堅苦しい挨拶だろうと思っていた僕は次の瞬間度肝を抜かれた。生徒会長が壇上に立った。しかもその生徒会長はなんとんでもない美少女だった。その生徒会長は顔が小さく、大きい目と桜色の唇をしていて、スタイル抜群

だった。まあそこまではいい、もともとお嬢様などもいるこの学校ではこの体育館を見回しただけでも、かなりの美少女がいたので気にせずともよかったが、僕が度肝を抜かれたのは、その美少女生徒会長様はなぜか周りを、軍隊で囲んでいたのだ。

僕は見間違いかと思っただけで何度も目を擦ったが、消えなかったのでおそらく現実なのであるうとなぜか少し冷静に分析していた。

そう、軍隊である。あの、よくゲームなどで出てくる重火器で武装した男達が10人くらいでまるで生徒会長を守るかのようだった。その、生徒会長はまるで、守られるのが当然だといわんばかりの顔で、マイクを握って喋ろうとしていた。しかしなぜか幾ら喋っても声がマイクを通して大きくならないのだ。どうも、アノ生徒会長は機械音痴らしく、マイクのスイッチを入れればいいのにスイッチが分からないらしい。と、それを見かねたらしく、軍隊の中から1人出てきて、マイクのスイッチを入れた。

『マイクが使えない人なんてはじめてみたわ！』

僕は、内心でそう突っ込んでいた。そして、今度こそ生徒会長の挨拶が始まった。

『ええーっと、まず、この学校に入学できた皆さんおめでとうございませう』

と、以外にも型どりの挨拶がはじまり、そこからは普通の挨拶だった。(まあ、軍隊に囲まれているけども)

そして、挨拶も終わりに差し掛かってきたとき、

『最後に、ココにいる男子生徒の皆さんに言っておきます。この学校では恋愛をしてはいけません！』

なんてことを宣言した。こればかりは今まで黙って聞いていた男子どもがいつせいにブーイングを始めた。

「はー！？ふざけんなよ！恋愛は高校生活の中で一番大事だろ！」

「そーだ！そーだ！」

皆いつせいに壇上の生徒会長に詰め寄ろうとする。しかし、その男子どもが壇上に近づくことは出来なかった。なぜなら、生徒会長

の近くにいた軍隊の皆さんがいつせいに銃を撃ったからである。しかも、その銃にはきちんと弾が込められていた。

「お、おい！なんで撃ってるんだよ！」

と、勇気のある奴が叫ぶと、生徒会長は傲然と、

「大丈夫。弾は暴徒鎮圧よ用のゴム弾だから」と、いった。

僕は啞然としてその光景を見ていた。ここは平気で校内で銃をぶっ放す軍隊がいる学校だということを絶望しながら認識していた。僕は今日2度目のこの学校になぜ来たかについて考えていた。

このときから、このめちゃくちゃな生徒会長と戦うことになるのはまだ知らずに・・・

第二話

静まり返った体育館で、生徒会長は、これで終わりだといわんばかりの態度で君臨していた。その空気の中で司会役の先生は何事も無かったかのように入学式を進めてようとしていた。その先生に向かって誰かが、

「おい、おかしいだろ！何で銃を携行してんだよ！しかも警告もなしに撃ってきたぞ！」

と、みんなの心のうちを代弁するセリフを言った。その声に反応して周りの男子も叫びだした。その叫び声の嵐の中司会役の先生は平然と

「こういうことは日常茶飯事ですから」

と大変なことをサラリと口にした。

「は？」

あまりにも予想外の言葉を返された為に叫んでいた男子生徒たちも静まり返った。

『はああああ！？これが日常茶飯事だつてー！ー！？』

僕は心の中で叫んでいた。おそらく大体の男子連中も同じことを考えているのだろう。所々で頭を抱えている生徒がいる。

『これがいつも起こっているってどんな学校だよ！てゆうかよく学校内で銃の携行と発砲が許可されたな！ああー。なんでこんな滅茶苦茶な学校に入ってしまったんだろっ』

僕は今日3度目の深い絶望を感じていた。

そうこうしている内に司会役の先生が入学式を進めていて次の入学生代表の挨拶が始まるうとしていた。（どうやらあの生徒会長は僕が頭を抱えているうちに壇上から退いていたらしい）

その、入学生代表の挨拶でも僕は驚愕する事になった。なぜならその入学生代表の男子生徒が、さっき会った不良男子生徒だったからである。

「あ、あいつ成績が1番だったんだ・・・」

大体どこの学校でも入学生代表は入試の成績のトップの生徒がするので、たぶんあの不良男子生徒がそのトップの生徒なのだろうが、『何であいつが1番なんだよ！明らかに不良っぽいのに！』

僕は不良男子生徒のギャップを感じていた。

しかし、ここで僕の心の中に一つの思いが生まれた。

『てことはあいつって見た目より真面目なのか？それならカツアゲとかはされないんじゃないか！？』

しかし僕の中では、

『もしかしたら先生の前では猫をかぶってるだけだということもあるし・・・』

と素直に喜べない後ろ向きな僕もいた。

そうやって僕が悶々と考えているうちに挨拶は終わったらしく不良男子生徒（名前のアナウンスを聞き忘れたので名前がまだ分からない。）は壇上を下りてきた。

そして、司会の先生が入学式の終わりを告げた。

こうして僕はこの滅茶苦茶な高校に入学することになった。

入学式が終わったあとは、それぞれのクラスに分かれて細かい説明を受けることになっていた。しかし、そこでも問題がおきた。それは、クラスメイトとなる生徒達をみているとき、1人の女子生徒を見かけたときに起こった、

『てゆうーか、よく見たら姫笹がいる！』

そう、それは知った顔だった。

その女子生徒の名前は、姫笹由利子。僕と同じ中学校だった女子だ。この姫笹は、お嬢様で、しかもかなりの美少女だったので中学校時代はかなりの数の男子が告白していた、しかし、元来気が強いので告白した男子は全員が手厳しく断られていた。（その断られた男子の中でひどい奴はしばらく女子と話すことも嫌がるほど、厳しく断られたらしい）僕はその姫笹とは3年間同じクラスで、日常や

行事などでは僕に対してかなり厳しい態度をとってきたりしたので正直に言えば苦手だった。

『何でココに姫笹がいるんだ！？あいつも皆と一緒に近くの高校に行くとはかり思ってたのに！』

僕は頭を抱えていた。よりもよってこいつかよつ、と叫びだしたくなつたが必死にこらえていた。その時、このクラスの担任の先生が入ってきたので、僕は考えるのを中断してその先生を見た。そこにいたのは、なぜか白衣を着た胡乱な目つき（死んだ魚の目でもない）のどこからどう見ても先生に見えないおっさんが立っていた。

『え？ま、まさかこの人が担任の先生？いや、まさかね・・・』

などと僕が希望的観測をしていると、そのおっさんは、黒板に黒田信蔵といういかにも渋いおっさんのような名前を書き、僕達に向けて、

「担任になった黒田信蔵だ。よろしく。好きなことは寝ること、趣味は寝ること、好物は酒のつまみ。俺は国語を担当するが、ほとんど寝るから自習だと思つていてくれ」

と、あきらかに先生とは思えないことを口走った。

『何この人！？ほとんど寝ることじゃん！てゆうかこれって駄目なおっさんの典型的な例だよ！よく教師がつづけられるな！』

僕はガツクリと肩を落としてため息をついた。

今日のこととは担任の紹介だけらしく、それで今日は解散となった。（まあ、あの先生がたんにめんどくさかったただけだとおもうけど）

しかし、この後に待っていることがことだけに、僕は憂鬱な気分で帰り支度をしていた。

とゆうかもこの学校を辞めてしまいたい気分であった。（おそらく、普通の男子生徒に初日からこんな気分させる学校はココ以外はないと思うが）

と、そこにあの不良男子生徒がやってきた。

「おい、行くぞ」

その不良男子生徒は問答無用で僕の手を引きどこかに連れて行くとした。

「ま、待つてよ。これからどこに行くの？」

僕は一応質問してみた。どうせ、体育館裏とかの目立たない場所に連れて行くつもりだと思った。

「空き教室だ」

案の定目立たない場所の名前を出されて僕のテンションの最低値は限界を突き破った。

「あの、そこで何をするんですか？」

「とにかく早く行くぞ」

僕はもうどうでもよくなってされるがままについていった。

そして、少ししてから不良男子生徒が空き教室の前でとまった。

僕はこれからのことを想像しながら震えていた。その僕を尻目に

「おーい。俺だー！あける！」

その言葉が言い終わると同時に教室の扉が開き中から一人の男子生徒が顔を出した。その生徒は大きなメガネを掛けていて、頭がよさそうなイメージを受ける生徒だった。

「その人か？長谷君が行っていたのは？」

「ああ、こいつだよ。多分役に立つぞ」

どうやらこの不良男子生徒の名前は長谷というらしい。その長谷君がいった言葉に僕は、

『ああ、やっぱりカツアゲなんだな・・・』

と、落ちこんだ。

「何してんだ早く入れよ。」

と、長谷君が僕を引きずって中に入れた。そして、扉をメガネ君が閉めた。僕は遂にカツアゲが始まるんだなと身を硬くした。しかし、いつになっても暴力などが始まらないのでおかしいなとおもい、

顔を上げてみたそこには、10人くらいの男子生徒がいた。その先頭で、なぜか長谷君とメガネ君が言い争っていた。

「長谷君。この人なんでおびえてるの？まさかあれほど言ったのに不良のカツアゲみたいにつれてきたんじゃないよね？」

「もちろんだよ。お前に言われたとおり出来るだけやさしくつれてきたんだが？」

「へー、じゃあどんな風に言ったの？」

「放課後に教室で待つていろつて言ったただけだが？」

「それだよ！明らかにそれつて不良とかのカツアゲの呼び出しみたいじゃん！」

「はあ？これで駄目なのか？」

「駄目だよ！とにかく・・・君、大丈夫だよ何もしないから」

と、メガネ君は後半の部分を僕に向けていつて僕を立たせてくれた。

「ごめんね。こいつ不良みたいだけど不良じゃないから。別にカツアゲをする為に君を呼んだんじゃないから安心してね」

「ええーつと、じゃあ何でつれてきたんですか」

僕は状況に頭が追いつかないままとにかく疑問を言ってみた。すると、とんでもない答えが返ってきた。

「君も聞いたろう？あの生徒会長の挨拶を。僕達はその生徒会長を倒して、生徒会長になって、この学校で恋愛ができるようにしたいんだ。そこで、一緒に戦ってくれる同士を集めているんだ。その同士の中に君を入れたいと思つてつれてきたんだ」

と、とんでもないことを言った。

「はあああああー！！？あの生徒会長を倒すだつてー！！？」

「しー。声がでかいよ」

「あ、すいません。でも無理ですよ、あの生徒会長には軍隊が付いてるんですよ？」

「大丈夫だ。こちらにも武器はある。おい、武器を持ってきてくれ」

そういうと、男子生徒の中から大量の銃を持った奴が出てきた。その中には拳銃やアサルトライフルのようなものなどのものすごく危ないものが沢山あった。

「こ、これってドコから調達したんですか？」

「闇ルートだ」

「それって大丈夫なんですか！？」

「大丈夫だ。たぶん」

「その多分が気になるんですけど！」

僕は全力で突っ込みながら、ふと気になったことを聞いてみた。

「これってまさか実弾なんか入っていませんよね……」

「大丈夫だ。特殊ゴム弾しか入っていない」

「その特殊って何ですか？」

「このゴム弾は通常のゴム弾より威力がかなり上がっているんだよ。だから特殊」

「それって大丈夫なんですか……？」

「大丈夫だ。敵は防弾チョッキを着ているから気絶するぐらいだよ」

その説明を僕は脱力しながら聞いていたが、

「てゆうか、さっき僕をこのあやしい一味に入れるって言いましたか！？」

「そうだが、どうした。」

「無理ですよ！僕は銃なんて持ったことはないし運動神経も無いんですよ！？てゆうかあなた達とは初対面なのに何ですか！？」

「それは、こいつの目を信じているからだ」

と、メガネ君は長谷君をさした。

「こいつは人の能力を見抜く力があるんだ。だから君はきちんと役に立つ」

と、そんなことを言ってきたので僕は長谷君を見た。その長谷君は視線で信じないと殺すつみたいなことを言っているの信じるしかなかった。

「最終的には男子生徒全員を引き入れるつもりなんだが武器が足り

ないという理由で少数精鋭にせざるを得なかったんだ。だから、長谷君の連れてきた君にはぜひ入ってもらいたい。どうだい、入ってくれるかい？」

僕は、真剣に悩んでみた。僕はあまりこういうことには関わりたくなかったが、これに入れば自分が変えられるような気もした。散々悩んだ末、結局僕は自分を変えるためにこの軍団に入ることにした。「分かりました。はいります」

「おお、ありがとうございます。これから頑張ろう」
僕とメガネ君はお互いに握手をした。

これが、僕の人生を変える戦争の始まりだった……

第三話

「よし、入ってくれたことに感謝するぞ。」

と、メガネ君は言いながら、僕の手をブンブン上下に振った。正直言ったらメチャメチャ痛い。

「おっと、自己紹介がまだだったね。僕は長谷恭二^{はせきやうじ}、この部隊の隊長を務めようと思ってる」

と、メガネ君改め恭二君はそう言った。(てゆうか務めようと思ってるって何なんだ・・・)

「それで、こっちが長谷幸一^{はせきいち}だ」

そう言っつて、隣の不良男子生徒改め、幸一君を示した。と、ここで僕はある疑問を持った。その疑問は、

「僕達は双子で、こっちの幸一が兄で、僕が弟だよ」

という恭二君の説明で解決された。そう、僕も苗字が似ていたの疑問に思っていたのだ。(てゆうかよく見たら顔立ちが似ている)

「で、君の名前は？」

とうぜん、僕も言わないといけなくなったので、

「えーっと、星宮一人です」

と、名乗った。

「分かった。一人くんだね。じゃあ、メンバーを紹介しておこう」

そう言っつて、恭二君が後ろのメンバーを指差していった。

「えー、右から松浦君、この人は主に特攻隊長みたいなことをして貰う」

確かに、その松浦君はとてものがっしりした体をしていた。

「よろしく」

「あ、よろしくお願いします」

意外と気さくな人みたいで一安心だ。

「次の人は武藤君、主に武器を調達してきてくれる」

その武藤君は、ヒョロっとした男子生徒だった。

「宜しくつす」

「よろしく願います。あの、こつという武器ってドコで調達してくるんですか？」

「・・・黙秘権を行使するツス」

「何で!？」

「裏から取り寄せてるんで、知ったら消されるっすよ」

「恐っ!」

と、なにやら怪しげな人だった。

「えーつと、次は・・・」

「何なのその間は・・・？」

「あとは、モブキャラだと思っといてくれ」

「何で!？」

「ぶつちゃけいってココまでの2人と、僕達兄弟は同じ学校だったから分かるんだけど、後の人たちは君と同じで今日見つけた人たちなんだよ。まあいいや、とにかく特攻兵Aとかで覚えてくれればいいよ」

「適當すぎる!明らかに扱いが酷くないですか!？てゆーか、あなた達、同じ学校だったんだ・・・」

「おう、そうだよ。いやー、中学校でもいろいろしたなー」

「その色々ってゆーのが滅茶苦茶気になるんですけど!てゆーか何やったんだよあんたら!？」

「ははは・・・まあ、色々とね」

そついう恭二君の目が、どこか遠くを見る目になっていた。

「それより、一つ気になってたんですけど、あなた達って何であなた達は生徒会長を倒そうと思ったんですか?あなた達を見ていると女子に興味があるからっていうような不純な理由で動いているとは思わないんですけど。てゆーか、生徒会長ってどうせ上級生なんだから卒業するまで待てばいいじゃないですか」

「それがそもいかないんだよ」

「え?何ですか?」

「ココの学校が私立であることは知っているだろう？それでココの学校は何人かの支援者によってお金をやりくりしている。まあ、そのおかげで入学するときのお金はあまり要らなかつたろう？」

たしかに、普通の県立高校より安かつたような気がする。

「で、ココの学校はその支援者の中で一番お金を出してくれた人の子どもを生徒会長にするんだ」

「は？でもそんなことしてもあまり意味は無いんじゃないですか？」

「ああ、普通の学校ならね……。しかし、この学校は特別なんだ。ドコが特別かというと、ココの生徒会長はこの学校でもすごい権限を、持つことが出来て、ほとんど生徒会長がこの学校のルールのようなものになっているらしい」

「え、てことは、生徒会長がこれをやれっていったら、絶対にやらないといけないうことでですか？」

「ああ、そのようなものだ。それに、さっき言ったとおり、今年の最高支援者の子どもがなる生徒会長だが、今年はなんと一年の奴の親が最高支援者らしい」

「ええ！？それって大変じゃないですか！てゆうかあれって同じ学年の人だつたんだ！？」

「ああ、だから倒したいんだ。」

「そうだつたんですか……。ん？でもなんでそんなにこの学校のこと詳しいの？」

「いや……。あはははは……。そんなことどうでもいいじゃないか」

と、引きつった笑顔を顔に貼り付けて、額から変な汗を流しながら恭二君はごまかそうとしていた。

「と、とにかく、この話はおしまいだ」

と、僕が言おうとした瞬間にそういわれてしまったので、僕は問いかけるタイミングを失ってしまった。

「では、今日はココまで、明日もちゃんと放課後にココに集合してくれ」

その一言で僕達の戦争は始まりを迎えていった

第4話

そして、なんやかんやあった翌日。僕は昨日恭二君に言われたことを考えながら登校した。昨日言われたことというのは、もちろん、幸一君のおめがねにかなった件についてである。

「はあー、本当に僕って役に立つんだろっか？どう考えてもあのメンバーの中では一番僕が弱そうなんだけどなあ。てゆうか役に立たなかったらその場で殺されるとか無いよね・・・」

僕はブツブツと独り言を言いながら歩いていると、いつの間にか校門の前についていた。僕は考え事を止めて、校門に向かって歩いていたら、その校門の前に本や、漫画でしか見たことが無いようなリムジンが止まった、僕はしばし啞然としていたがすぐに、ココが元お嬢様学校であることを思い出して、これぐらいは日常茶飯事なのかなと、考えつつ今度こそ校門をくぐって、昇降口に入っていた。

教室に着いた僕は、特にやることも無かったので、中学校時代にそうしていたように読書を始めた。そして、そのまま時間を忘れて本を読んでいると、

「おはようっス」

と、声が掛かった。はて、僕はこのクラスに挨拶を交わすような人がいたっけ、てゆうかこの声とこのしゃべり方どっかで聞いたことあるぞと考えながらその人物を見ると、そこには昨日の紹介で不吉なことを言っていた武藤君がいた。

「えーっと、おはよう。てゆうか武藤君もこのクラスだったの？」

「ええー、ひどいっスね。まあ、俺もあんたが同じクラスだって今知ったんっスけどね」

「ほとんど僕と同じなのに何でひどいって言ったの・・・」

「まあいいじゃないっすか。これからよろしくっす。俺は友達がこのクラスにいないんで、これからは朝から一人の席に入り浸ってやるっす」

「サラツと変なこといわれた！入り浸るって何だよ！もうちょっと抑え目の表現をしようよ！」

僕は、武藤君の警戒レベルを引き上げることしようとした心の中で思った。てゆうか、いきなり下の名前を呼び捨てにしたよこの人・・・でもまあ嫌ではないんだけどね、

「まあまあ。ところで何読んでるんすか」

そんなことを聞かれたので僕は慌てて読んでいた本を隠した。

「ええー、何で隠すんすかー」

「いや、ええーっつと・・・」

僕が読んでいたのはいわゆるライトノベルというやつで、僕は中学校時代に色々あったせいで人に本を見せるのが嫌いだった。そのせいで反射的に隠してしまったのだ。

「まあまあいいじゃないっすか」

と、武藤君は言いながらゴソゴソと僕の机の中を探ってきた。

「わわわ、ちよつと！」

「おおーあつたあつたっす。あれ、これって・・・」

僕は、必死に抵抗するも武藤君にそのことごとくさばかれ本を奪取された。

『うわー！どうしよう！変な奴って思われる！』

しかし、武藤君の口から出たのは僕の予想外の言葉だった。

「これって、この前発売した新刊じゃないっすか！これ、一人も買ってるんっすか！？あとで貸して欲しいっす！」

なんと、この武藤君も僕が読んでいたライトノベルのファンだったらしく、意外と趣味が合いそうだった。

「なんだ、別にライトノベルなら隠さなくてもよかったのに、俺も結構読んでるんっすけどね、これはおもしろいっすよね」

その後、しばらく、ライトノベルについての話で盛り上がった。

予想通り、僕と武藤君は趣味がほとんど同じで、楽しく話すことが出来た。と、そんな僕達に声が掛けられた。

「おい、あんたら」

僕はドキツとした。まさか、声が大きすぎたのか？それとも僕らが気に食わないのか？などと、ビクビクしながら声の方向をむくとそこには、見覚えのある、男子生徒が立っていた。名前はたしか・
「ええーっと、特攻兵A君？」

そう、昨日の紹介で恭二君にモブキャラ扱いを受けたあの生徒達の中の特攻兵Aと名付けられた男子だった。

「ちげーよ！俺はそんな名前じゃねーよ！」

「えっ？違うんすか？」

「なんでそこ驚いてるんだよ！俺は山崎隆二やまざきりゅうじって言うんだよ！」

「へー、ザキヤマ君っすか」

「やめるその某お笑い芸人みたいな呼び方！」

特攻兵A君改めザキヤマ君、じゃなかった、山崎君は武藤君のボケに的確な突込みを入れていた。

「で、何しに来たんすか、ザキヤマ君」

「あーもうそれでいいよ！なぜ来たかって言われても暇だったからとしかいえねーよ」

どうやらこのザキヤマ君（なんか言いやすいからこっちにしよう）も、武藤君と同じで、暇だが、顔見知りがないという状況下で、僕達を見つけたから来たらしい、でもまあ中学校時代にイジメを受けていたせいでもくろくに友達がいなかった僕としては賑やかになったので、少し幸せだった。

そうこうしている内に、どうやら始業時間になったらしく、チャイムが鳴った。その音で、言い争っていた（もとい、武藤君がザキヤマ君を一方的にからかっていた）2人も、席の方に行った。

この学校には中学校の時にあった、朝本を読むような時間は無いので、いきなり、SHRから始まるようになってるので、僕達は先生を待った。しかし、なかなか先生が来ないので、段々教室が騒

がしくなってきた。と、まるで、そのタイミングを待っていたかのように、教室のドアが開いて、今日も死んだ魚のような目の黒田先生が入ってきた。

「おおい、静かにしろー」

相変わらずやる気を感じられない声でそう言ったので、しばらくはこのザワザワ状態（今考えた）が続いた。やっと静かになりかけたところで、後ろのほうの席から、

「先生！なぜこんなに来るまでに時間がかかったんですの!？」

などという、なんと言うかまあ、お嬢様口調というべきベタベタな口調で先生を詰問した奴がいた。そいつの顔は見ないでも分かる。なぜならそいつは姫笹で、中学校時代にしこたまその口調を聞いたからである。

「ああーん？そんなもん寝てたからに決まってるだろ」

「勤務中に寝るなんて教師の風上にも置けませんわね」

「とにかく、時間が無いから座れ。ええーっと今日は午前中に自己紹介と委員会決めをして、終了だ。俺が面倒くさいからさっさと帰れよ」

先生は姫笹の追及をあっさりとかわし、今日の予定を喋った。（
てゆーか、最後のは必要か？）

とりあえず、SHRはそれで終了した。

第五話

朝のSHRで黒田先生が言っていた通り1時間目はクラスメイトの自己紹介だった。これがあの適当人間黒田先生の司会で、大変だった。何が大変だったかというところ、黒田先生は国語教師のくせに人の名前を勘違いして読みまくった。それはもうすごかった、ワザと間違えているんじゃないかってぐらい間違っていた。例えばこんな感じで、

「次、えつーと権田^{だい}大」

「ひろしです！」

これ聞くと昔の芸人のギャグみたいだ。まあ、こんな感じのことが結構続いた、僕もひとりなんて呼ばれた、どっかのタレントかよ！と心で突っ込みつつ、とりあえず自己紹介を無難にこなした。そしてクラス中が大爆笑した呼ばれ方が1つあった、それは

「次は、ザキヤマ」

「何で！？どっからどうみても山崎としか読めないでしょ！？少なくとも今回はワザとっしょ！？」

と、思わず敬語を使い忘れるほどの突込みを山崎君がしたところで皆が大爆笑した。いやーあれはすごかった。

と、なんやかんやありながらとりあえず自己紹介が終了した。そして今は1時間目と2時間目の間の時間で例によって3人で話していた。といつても

「いやー、あの先生すごいつスね。1発でそれいうんっスからね」

「うるせーよ！こっちは思わずすごい勢いで突っ込みましたよ！」

「ええー、でも事実じゃないっスか」

「ちげーよ！そんな事実少しもねーよ！」

とかなんとか言い争っている2人を眺めているだけだけどね。そのうちにチャイムが鳴って2人も席に戻っていった。僕はその背中を見ながらこの後の委員会決めもまた波乱づくめなんじゃないか

と
考
え
て
い
た
。

続第5話

さあ、とにかく2時間目の委員会役員決めが始まるうとしていた。しかし、例によってまた黒田先生は授業が始まってもなかなか来ない。しかし、クラスが騒がしくなると、やっとクラスに入ってきた。てゆうかこの人狙ってるんじゃないだろうな・・・。

「さーて、とりあえず委員会役員決めを始めるぞ。つっても一々立候補と多数決で決めるのがめんどいから、俺の独断と偏見で決めるぞ」

などと、教師にあるまじき言動をしつつ、出席簿を開いて、見だした。えっ？まさか本当にそんなんで決めちゃうの？

「あー、それとこの判断にお前らの拒否権はないからな。あと、ココで決まった役員は1年中続くからな」

うわー、まじかよ。などの声が男子8割、女子2割ぐらいの割合で起こった。(このクラス女子が圧倒的に多いので、男子をほとんどを使っても、クラスの割合にすると、8割ぐらいにしかならない) てゆうか、女子のほとんどはそれでいいのかよ・・・。

「んじや、とりあえず、学級長を決めてしまっぞ。これは、男子1名女子1名だな。じゃあ・・・女子の学級長は姫笹」

「分かりました、頑張つて務めさせていただきますわ」

おおー、まああいつは中学校時代も3年間学級長だったしね。それに気は強いけど美少女だから結構男子にファンがいるっぽい。その証拠に、姫笹がやると決まったので今まで何処と無くやる気がなさそうだった男子達のやる気がメチャメチャ上がった。まあ、別に選ばれる確率の低い僕には関係の無いことだけだね。

「で、次の男子の学級長は星宮だ」

は？僕は耳を疑った。だってそうでしょ？こんな地味な僕が選ばれるわけがないと本気で思ってたんだから。あつ、そうか僕のほかにもこのクラスに星宮って男子がいるんだ。多分そいつのことを言

ってるんだ。うん、そうに違いない。などとクラス中の視線が僕に集まるのを感じながら現実逃避気味のことを考えていたら、

「おい、星宮！星宮一人！」

と、もう1回名前を呼ばれた。どうやらマジで僕のことらしい。

「おい、星宮立って何か言え」

そういわれたので僕は嫌々ながらとりあえず立って、

「えーっと、1年間頑張ります」

と、無難に挨拶をしておいた。そのときの男子からの目線がとにかく怖かった。

「えーっと、姫笹はしつかりしてそうだったから選んで、星宮は何か1番印象に残ってたから選んだ」

おいおいおい、ストップストップ。何言ってるんだこの適当先生は。印象に残ってたってそんな理由で学級長をさせられたのか！？てゆーか何でよりもよって姫笹となんでよ！あいつとはこれからあんまり関わらないと思ってたのにその予想が入学2日目でぶっ壊れたよ！

「はい、んじゃ次は・・・」

僕はその後の委員会役員決めのをほとんどを放心状態で過ごした。

そして、意識が戻ったときにはもうすべての役員が決まっていた。

「よーし、んじゃ決まった奴はお互いに挨拶でもしとけ。あと仕事は数日後に各委員会から説明があるから呼ばれたら行け。んじゃ、やることもう終わったからあとは終了まで自由にしとけ。俺は寝る」

と、本当に寝だした適当先生を見て、クラス中が好きなことをやり始めた。さて、僕はどうしようかな。てゆーか、まだシヨックから立ち直れないんだけど・・・。

「いやー、すごいつスね。学級長になれたなんて」

「そうそう。特に相方が姫笹となりや立候補だったら激戦必死だったぜ」

とかなんとか言いながら武藤君とザキヤマ君（もう面倒くさいか

らこれで決定)がやってきた。

「いやいや、立候補だったらそもそもやるうと思わなかったよ！てゆうーか、僕は目立つことが大嫌いなんだよ！」

「またまたー謙遜しちゃうって」

「謙遜とかじゃないからね！？事実を述べているだけだから！」

「いやいや、お前がそう思っていて男子どもはお前が憎いだろっよ」

「でしょーね！だって決まったときのみんなの目がまじでやばかったもん！視線に殺傷能力があつたら僕蜂の巣だよ！」

などと、ひとしきり言い合って落ち着いたところを見計らって僕は話題を変えた。

「それより、2人は何かやらされたの？僕あんまり意識が無くて聞いてなかったんだ」

「俺は体育委員だ」

「へー、まあ、確かに体育会系だよね」

「ああ、でも理由がちよつとな・・・」

「え？どんなだったの」

「ザキヤマだからっていわれた」

「何それ！？」

「俺にも分かんねーよ。てゆうーかザキヤマはな、ザキヤマだけはな・・・」

と、なにやら遠い目をしだしたザキヤマ君を放って置いておいて次は武藤君に聞いてみた。

「ああ、俺は調達委員会になつたっス」

「何それ聞いたこと無いんだけど！？」

「どうも、行事のときにいろいろなものを調達する委員会だそうっスよ」

「へー・・・、そんなのあるんだ・・・」

「ちなみに理由はお前裏で武器商人とかしてそうだからだそうっス」

「それってばれてない！？てゆうーかよく考えたら適任すぎる！」

なんか、もうあの先生エスパーかなんかかってレベルだろこれ。などと考えていたら僕に近づいてくる人影があった。げっ、あれって姫笹じゃん。その姫笹は僕の前まで来て、

「星宮一人、中学校のときのように私の足を引っ張ったら承知しませんわよ！」

と行って去っていった。てゆうかそれだけかよ！

「え、中学校のときってどうゆうことっすか？」

「あー、言っただけだったっけ。僕と姫笹は同じ中学校だったんだよ」「な、なにー！？あの姫笹とか！？くそーうらやましすぎるぜ！」

「あー、それで嫌がってたんすか。大方中学校のときに何かあつてそれで苦手になつたってとこっすか？」

「うん・・・、そうなんだ。まあ、今度説明するよ。てゆうかもうこの授業終わるよ。今日はすぐ行った方がいいんでしょ？あの空き教室に」

「そうっすよ。なんかやるみたいっすよ」

「じゃあ、早く行こう」

そうやって僕は強引に話を逸らして帰る準備を始めた。

第6話

昨日行った（無理やり連れて行かれた）空き教室に武藤君と、ザキヤマ君と向かいながら僕はさっきの話の逸らし方は無かったなと思っていた。明らかに不自然すぎた。でも、僕的には中学校時代のことはあまり思い出したくなかった。とにかく、このことはいずれ話すことにして、そのことに関してはおいておこうと思った。

「さーて、今日は何するんスカね」

「あん？お前あいつらと一緒に中学校なんだろ？なんでわかんねーんだよ？」

「いや、あの人は何考えてるかあんまりわかんないんスよ」

「へー、そうなんだ。でも、結構表に出すような人に見えたけど」

「人は見かけによらないものつスよ」

そうこういつてる内に昨日の空き教室の前に着いた。中から話し声がするので、もう誰か来ているのだろう。武藤君が先頭でドアを開けた。そこには・・・

「カチコミじゃあーい！！！！」

と叫ぶ、銃器や、防弾チョッキなどで完全武装の恭二君（なぜか眼鏡をはずしている）がいた。

「色々突っ込み所が多すぎてどこから突っ込んでいいか分からない！！」

「なんなんスカこれ」

と、武藤君は恭二君の近くにいた幸一君（なぜか眼鏡をしている）に聞いた。

「みりやわかんだろ。これから生徒会長を倒しに乗り込むんだと」

「は！？今から！？」

「ああ、今からだ星宮君！！都合のいいことに、あの生徒会長は僕達と同じ1年生だ！！授業は終了している！！！！」

と、僕の質問に語尾に！をたくさんつけた恭二君が説明してくだ

さった。

「でも、その生徒会長が何処にいるか分かってるんですか？」

「その点は大丈夫だ!!! さっき、偵察兵Aに生徒会長を尾行させた!!!」

「それって、立派な犯罪ですよね!? あと、名前は覚えてあげてください!」

「大丈夫だ!!! 正義の前にはなんでも許される!!!」

「思いつきり悪役の考え方じゃないですか!」

「まあまあ、いいじゃないっすか」

僕と恭二君が言い争っている間に準備を整えた武藤君がとりなしにかかった。

「いやいやいや、でもいきなりすぎでしょ!」

「それが面白いんじゃないっすか」

と、よくわからないことを言い合っていたら、空き教室のドアが開いて、1人の男子生徒が入ってきた。

「おお!!! 偵察兵A君どうだった!!!??」

今度は?まで増量したよ。

「はい、生徒会長は今、生徒会室にいます。さっき入っていきましたから」

「よっしゃあー!!! 初陣だ!!! やるからには勝つぞ!!! 皆準備しろ!!!」

と、何かもうスーパーハイテンション状態の恭二君の号令で皆が準備を始めた。

「え? え? これってマジで行くの?」

「そうだ!!! ほらほら!!! 早く星宮君も準備したまえ!!!」

「そんなこといわれても何をどう準備したらいいかわかんないですよ!」

「じゃあ、教えてあげるっす」

音も無く武藤君が現れた。

「うわ! びっくりした。いきなり出てこないでよ!」

「まあ、とにかく教えてあげるっすからついてきてくださいっす」
「ええー！？」
「なんやかんやでカチコミに参加するはめになってしまった。」

第7話

なんやかんやで、参加することになった、生徒会長討伐作戦（今僕が考えた）のために準備（防弾チョッキなどで武装）をしていた僕は、疑問に思ったことを準備を手伝ってくれた武藤君に聞いてみた。

「てゆうか、恭二君のキャラが明らかにおかしくなっていたのは何でなの？」

「ああそれは確かに疑問に思うっすね。えっと、恭二君と幸一君は双子だってことは知ってるっすよね？」

「うん。自己紹介の時に言ってた」

「実はあの2人メガネをとるとあんなふうにしてハイテンション状態になって、メガネをすると真面目キャラになるという特徴があるんすよ」

「は！？どういうこと！？二重人格！？」

「まあ、概ねそんなものっす」

「いやいやいや、ちよつと待って、おかしくない！？」

「まあ、すぐ慣れるっすよ」

「そういうことじゃなくて、なんでそんなことになってんの！？」

「ふふふ・・・、知らない方がいいっすよ。俺らも知ったときはひどい目にあって、1週間寝込んだっすからね・・・」

「何があつたの！？てゆうか大丈夫か！？」

武藤君はなにやら危ない笑みを浮かべて遠くをみながら現実逃避を始めた。

「おーい！！！準備は出来たか！！！！」

と、このタイミングでスーパー恭二君（長いからもうこれでいいや）から無駄にテンションの高い声を掛けられた。

「出来たっすよ」

とりあえず復活した武藤君が返事をした。

「よっし！！！！ではこれから力チコミをかけるぞ！！！！目標は生徒会室！！！！作戦は今から幸一が話す！！！！」

「では、作戦を説明する。まず突撃部隊が突撃します」

恭二君に代わって前に出てきた真面目幸一君が作戦を説明し始めた。結構真面目な作戦らしい。場の空気が張り詰め、幸一君の次の言葉を待った。

「で、その後に、そのほかの奴らは、まあ、どうにかしてくれ」

「作戦が後半雑すぎるは！」

「何を言っんだ星宮君。これも立派な作戦だぞ」

「どこら辺が！？」

「・・・全部？」

「何で疑問形なの！？」

「まあ、それはいいとして」

「見事なまでにスルーされた！」

「とにかくがんばるぞ」

おーーーー！！！！！！！！！！

僕以外の人たちは皆幸一君の言葉に答えていた。

「まあ、すぐなれるっすよ」

と、隣にいた武藤君がさっきも聞いた台詞をいった。本当にこんなので勝てるのか？

第8話

「よっしゃー！！準備が完了したところで、各自に武器を配る！！！」

おおー。何か本格的だな。

「では、特攻兵から配るので名前を呼ばれた人から来てくれ。まずは、松浦」

「あいよ」

まずは松浦君がごつい見るからに凶悪そうなアサルトライフルを支給された。

「じゃあ、次は特攻兵A」

「違うつつつてんだろ！？俺は山崎だ！」

「うるさいな。わかったよ言い直すよ。ザキヤマ君」

「一ミリも分かつちやいねーじゃんか！」

例によってザキヤマ君が押し問答をしながら、松浦君と同じものを受け取った。

「では次は・・・」

と、次から次へメンバーが呼ばれていった。

「では、今度は後ろのメンバーの武器を配る。武藤」

「はいよっす」

今度は武藤君が呼ばれた。その武藤君には小さい拳銃と、なにやらごぶしだいのものが渡された。

「それ、なに？」

「ああ、これは閃光弾っすよ」

どうやらこれで目くらましをするらしい。

「では、星宮君」

どうやら、武藤君と話しているうちに僕の順番になったらしい。

「はい」

僕は他の人と同じようにとりに行った。

「これが君の装備だ」

そう言われて渡されたのは布状のものが巻きつけられている筒のようなものと長細いものだった。てゆーかこれって・・・

「包帯と木刀ってどういうことですか！」

「いや、銃が足りなくなってしまうって常備している木刀を渡したんだ」

「絶対故意に銃の数を少なくしたでしょ！だって木刀なんて普通常備されてないし！」

「まあ、きみはどうせ後方支援だからいいじゃないか」

「それで包帯は分かるとして木刀は要らないだろ！」

「がんばれ、ラストサムライ」

「うわ、すごくない！」

なんかもう、勝てる気がしないんだけど・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0526v/>

生徒会長とバカたちの戦争記

2011年10月4日03時36分発行